

## 蘭嶼とバタン諸島の民族的関連性——研究史をふりかえって

黄智慧

(中央研究院民族学研究所)

蘭嶼島のYAMI/TAO族は目下のところ、近年台湾政府に認定されたThao族、Kavalan族をのぞいて、台湾原住民各族の中でも人口数が最も少い一小族である。ただし研究論著の数量から見た場合に、蘭嶼民族学の研究の成果は膨大であり、この点、彼らは台湾原住民各族の中で、疑いの余地なく一大族の地位にある。百余年以来、蓄積された研究成果から見れば、三つの意義の上において、蘭嶼の民族学研究は台湾の民族学/人類学史上においてトップを独占している：

- 一、古典民族誌の手本を創る——鳥居龍藏(1870-1953)によって書かれた《紅頭嶼土俗調査報告》(1902)は、台湾原住民各族の中で、最も早く出版された最初の民族誌である。それだけでなく、日本民族学界においても、人類学的フィールド・ワークの方法論を踏んだ後に出版された最初の民族誌である。
- 二、映像民族誌のさきがけを開く——二十世紀前半の台湾民族史上において、人類学者によって出版された映像民族誌記録は全部で三冊しかなく、その中の二冊はYAMI族についてである。すなわち鳥居龍藏(1899、《人類学寫真集：紅頭嶼之部》)、及び鹿野忠雄(1945、*An Illustrated Ethnography of Formosan Aborigines, Vol.I The Yami*)である。
- 三、原住民族の対外関係が初めて確認された——台湾民族学史上、最も早く台湾以外の特定の民族の文化的な類縁関係が調査され、研究により確認されたのは、蘭嶼とバタン群島の区域に関する研究成果である。

上記第三項の研究課題が二十世紀前半において、台湾の民族学研究史のなかでも重要な課題の一つとして注目されてきたが、戦後において長く放置されてきた。近年(1998)になって、YAMI族自身の強い関心から、バタン諸島を訪問したのがきっかけとなり、お互いの往来交流が実現され(2002年にバタン諸島から蘭嶼訪問)、ふたたび両者の比較研究の関心が高まってきた。本稿の目的とは、当課題の学術史的な整理にあり、今後の研究へ参考として提供できることを期待する。

蘭嶼とバタン群島の文化類縁性の学術上の探索に関して、二十世紀前半においては、それぞれ二つの時期に集中している。第一期とは1900年代、二方向より進められた。一方は鳥居龍藏が蘭嶼にてフィールドワークを行った後、

彼はフィリピン民族史文献を広く読み、台湾原住民の渉外関係の課題を提出した。もう一方向はフィリピンのルソン島、バブヤン群島、バタン群島にて言語学民族学のフィールドワークによる研究を行ったドイツの言語学家 Otto Scheerer(1858-1938)である。彼は鳥居龍藏の蘭嶼研究文献をもって対照とし、両地の文化比較研究を行った。

鳥居龍藏は蘭嶼には短い二ヶ月余り滞在しただけであったが（1897）、にもかかわらずその YAMI 族についての研究成果は非常に独特且つ全貌的である。彼は当時、全島に八つの村落があるのを見、人口一千二、三百人（その中 Dimawawo と Ivatashi の二つの村は今日においてすでに存在しない）いると記録した。日、台学界における最初の民族誌類型を描き出した外、鳥居は史料収集の本領を発揮し、蘭嶼の清朝史料記載、地名等等について、先駆的な考证精査作業を全て行っている。民族誌の外の短文の中で、彼は最も早く各村落の古い伝説、とくに朗島、野銀、紅頭各社とバタン群島住民の往来の口頭伝説を收集記録し、加えていくつかの基礎語彙と風俗習慣の比較を行い、その結果、彼は蘭嶼とバタン群島の住民は人類学上、同一のグループに属するという結論を得たのだった。（鳥居 1902）YAMI 族の民族特性を把握した後、鳥居は視線をフィリピンの十五世紀の後の史料へと転じた。これら史料を読む時、彼は台湾原住民、特に蘭嶼と常々比較することを忘れなかった。例えば、他が発見したのはいわゆるバブヤン群島の名称 Babuyan の、その babui とは「猪」の意味であり、この単語は台湾原住民各族及び蘭嶼はみな共通である。彼は曾て嘆いて曰く：「台湾の人類学的調査をなす者にしてフィリッピンのことを知らぬのは学問上実に不忠であります。」（鳥居 1904：608）

およそほぼ同一の時期に、ルソン島及びその北のバブヤン、バタン群島にて長期のフィールドワークを行ったドイツの言語学家 Otto Scheerer は、鳥居龍藏の蘭嶼研究文献をもって対照とし、並びにアメリカの領事 J. Davidson (1872-1933) 等人の見聞記を参考し、蘭嶼の船の雕刻や模様とパプア・ニューギニアの関係について論じた。彼はまた飲酒、吸煙の習慣の差異に注意を向いた。これらはバタン群島においては非常に早い時期に記録されたが、しかし YAMI 人の習慣には見られないものである。特に甘蔗酒の名称は Basi であり、即ちバシー海峡（Bashi）の語源であり、当時バタン群島におけるこの風習が盛んであったことをうかがわせる。何故に移動の後、完全に忘却されたのであろうか？それは Scheerer さえも解き明かすことができなかった。最後に、彼は一つの重要な問題を提示した。それはすなわち彼がバタン群島の研究をすすめるなかで発見したのは、当群島上のいわゆる先住民と、後にスペイン人によってキリスト教化された住民の間の差異である。これは鳥居が観察したところの蘭嶼におけるいわゆる無酋長制の社会の記録へと特に関心を向けさせた。鳥居が注意したのは、基本的に YAMI 族は円卓会議を持っており、議長をもって中心とする合議制であるが、ただしある人は一般人と平

等の権利をえることができず、会議に席を並べることができず、物品の分配に預かれず、儀式に参加することもできない。Otto Scheerer が疑ったのは、これはおそらく一種の後來の移民/勝利者とそれより早い被征服の先住民の間に生じた階層関係により生じたものではなかろうかということである。

この時期の内において、直接にイバヤット島の人と接触し、台湾原住民と広い比較を行ったのは森丑之助（1877-1926）である。1911年7月、イバヤット島からの男女27名の一行が漂流して宜蘭府頭廻堡大溪庄の海岸にたどり着いた。彼らは台北へと送られ、数日後に淡水より出発し、先に香港を経由した後、マニラへと送還された。森丑之助は彼らが台北にいる期間を利用して短いインタビューを行い、そして彼が詳しい台湾各原住民の民族学材料と比較したのである。体質、言語、土俗、地理観念、伝説のあらゆる項目の比較にわたっており、彼も台湾各族の中で、イバヤット島と台湾紅頭嶼の民族が最も類似しているという結論に至った。特に森は彼らが十六、七世紀の生活状態及び風俗と当時二十世紀の紅頭嶼が最も類似しているともいっている。

こうした研究の後、大正期間には総督府の臨時台湾旧慣調査会によって主導された大規模な原住民習俗の調査事業があり、その中には、全島の各族が含まれていたのであるが、しかしだ蘭嶼 YAMI 族のみが欠けていた。その原因は不詳である。

蘭嶼とバタン群島の関連を課題とした研究の第二期は、台北帝国大学が成立した後から二次大戦が終結するまで（1928年—1945年）に集中している。1928年には、まだ台北高校に就学中であった鹿野忠雄（1906-1945）がすでに蘭嶼島の調査へと赴き、船に関する論文を発表した。翌年、台北帝国大学の土俗人種学教室の移川子之藏（1884-1947）が率いる人類学者調査団が、蘭嶼にて短期のフィールド調査を実施した。当時、島上には七つの村落があり、戸数は三百六十五戸、人口は一千六百一十九人であった。この時期の研究は早期の鳥居龍藏の研究成果に立脚し、並びに警察の通訳を通じて獲得された詳細な系譜資料である。移川の推算に基づくと、イヴァリヌ村の前十四代の祖先とは、バタン島よりここに来たのであり、ならば一代をもって二十五年と見積もると、蘭嶼に来たおよそ時間とは、距離にして当時から約三百五十年前となる。

この外、移川はまた二本のバタン群島に関する早期の日本漂流者が見聞した記録を探し出した。一篇は1668年江戸時代の尾張国の記録である。この記録は1687年に海賊 Dampier がバタン島に侵入する前であり、また1783年にスペインの軍隊がバタン群島を侵略、征服する以前に残されたもので、近代国家によって影響される以前のバタン社会を代表しうるものであり、きわめて貴重な史料である。そのほかの一篇とは1831年に江戸備前国漁民がバタン群島へと漂着した記録である。文献史料の対比整合によって、移川は両者の間に、体貌から、髪型、褲、女子の腰巻き、衣装、籐縫の帽子等に至るまで、

特徴がみな互いに一致することを見出した。特にその船の名称と大きさも同じであり、玩具の船の製作の伝統まで共通であった。主食も似通っていて、海水によっての烹煮法である。異なる所とは、バタン島には甘蔗製の酒があるのに、YAMI 族にはないことである。しかし移川はこの点について、あまり多くの推測解釈をしていない。社会組織に関しては、移川は両者が皆性情温和で、闘争が非常に少ないと注目している。社会統治では合議制を採用し、相當に平等である。最後に、語彙の比較上、移川は百近い民俗基礎語彙を比較し、両者の民族的文化的関連性が更に確認された。

後に訪れた東京帝大にて地理学を専攻する鹿野忠雄は、1928 年より十余年間にわたって、蘭嶼にて前後十次におよぶフィールド・ワークを行った。大学卒業した後、台灣總督府理蕃課に雇用され、調査を継続した。蘭嶼人の記憶力は極めてよく、当時の彼を知る人は今に至るまで健在であり、彼についてかなりいい印象を持っている。(余光弘、董森永 1998) 二次大戦時期には、彼はマニラ科学局博物館の收藏品で両地の比較研究を行った。並びにマニラ市に在住のバタン島移民をインフォーマントとして訪査を行い、高い研究成果を獲得した。彼の観察事項に含まれるのは (1) 集落、家屋、(2) 衣服、装飾品、(3) 農業と家畜の飼育、(4) 漁業と船、(5) 食物、(6) 工芸、(7) 季節暦法等、各方面にわたっている。そのほか、彼は博物館の收藏品を利用して、細部まで物質文化の比較材料、及び動植物の語彙を集計整理した。両地の状況を比較した後、彼は蘭嶼はバタン群島に比べて更に多くの伝統文化の一部を保存しているという結論を得た。すなわち、バタン群島の社会変遷の速度は蘭嶼に比較して更に速いといえる。

二十世紀前半期においては、研究者はけっして同時に両地の島嶼の間でフィールドワークを行ったり、或いは実地考察の確認を行うことはできなかつた。ただし、信頼できる文献史料、博物館資料及びインフォーマント訪談の方式を通じて、両地の文化の同源性及び類縁性が確認されていたのである。当時すでに提出されていた、両地の多くの文化的な差異傾向に至っては、その原因は尚も解かれておらず、今後研究者によって、さらに一步進んだ解釈が提示されるを待つ状況である。二十世紀後半期の歴史発展を経過した後、両地の文化的な容貌は、頗る多くの変化を生み出した。この課題に関しては、幸いにも前人が已に残した探索の痕跡があり、二十世紀下半期の研究者によって、民族誌、神話学、考古学、言語学の方面にまた更に多くの研究資料が蓄積されている。今後両地の島民のお互いの往来は、研究者に必ず更に前述資料の検証をさせ、この台灣民族学史上、最も早く発展した対外関係の課題は、更に豊富な理論内容の見解を湧き出すであろう。

## 参考文献

Davidson, James W. 1903 *The Island of Formosa, Past and Present.* London; New

- York: Macmillan.
- Kano, Tadao and Segawa, Kokichi
- 1956[1945] *An Illustrated Ethnography of Formosan Aborigines, Vol. I The Yami.*  
Tokyo: Maruzen Company.
- 移川子之藏
- 1931 〈紅頭嶼 YAMI 族と南方に列なる比律賓バタンの島々。口碑伝承と事実〉、『南方土俗』1(1):15-37.
- オットー・シェアラー著・金子エリカ訳
- 1983 〈ルソン一台湾間の列島の民族学について〉、《えとのす》20: 21\_35。(原文 Scheerer, Otto 1906 Zur Ethnologie der Inselkette zwischen Luzon und Formosa. Mitteilungen d. Gesellschaft f. Natur-und Voelkerkunde Ostasiens. Vol. XI, Part 1, Tokyo.)
- 鹿野忠雄
- 1944 〈紅頭嶼 YAMI 族と飛魚〉、太平洋協会編《太平洋圏》: 503-573。  
東京: 河出書房。
- 1996[1946, 1952] 《東南亞細亞民族学先史学研究》第一卷、第二卷、東京: 大空社。
- 黃智慧
- 2002 〈蘭嶼與巴 丹群島的文化類縁關係〉, 『南島民族海洋文化論壇』會議論文、7月5-6日、台北市原住民事務委員會
- 2003 〈宏儻了的文化鎖鍊——与那國島的玉祭與周圍諸民族〉、《第九回 中琉歷史關係國際シンポ論文集》、福建師範大學。(近刊)
- 佐々木高明
- 1977 〈二つのバタン島漂流記〉、pp.200-228, 黒潮文化の会編《日本民族と黒潮文化》、東京: 角川書店。
- 陳玉美
- 2001 《台東県史: 雅美族篇》、台東県政府。
- 鳥居龍藏
- 1900a 〈支那人の紅頭嶼における歴史〉、《台灣協會会報》26:12-16。
- 1900b 〈紅頭嶼地名考〉、《台灣協會会報》26:7-12。
- 1902 〈紅頭嶼土人の古伝〉、《東洋学芸雑誌》19(244):44-47。
- 1904 〈フィリッピン諸島誌〉、《鳥居龍藏全集》11:607-610。
- 1976[1899] 《人類学寫真集: 紅頭嶼之部》、《鳥居龍藏全集》11: 329-353。  
東京: 朝日新聞社。
- 1976[1902] 《紅頭嶼土俗調査報告》、《鳥居龍藏全集》11: 281-328。東京: 朝日新聞社。

余光弘

2002 〈巴丹傳統文化與雅美文化〉、《東台灣研究》6：15\_45。

余光弘、董森永

1998 《台灣原住民史：雅美族史篇》、台灣省文献委員會。